

東京新聞「この人」



目や耳の不自由な人に映画館の喜び

ひらつか ちほこ 平塚 千穂子さん(44)

この人

20席ほどの観客席には盲導犬の姿も珍しくない。「映画館に行くことをためらう全ての人に開かれた場所をつくりたい」。ユニバーサルシアター「シネマ・チュプキ・タバタ」を東京都北区で開業した。

劇場名は自然の光を意味するアイヌ語から。目や耳が不自由な人のため、全作品で登場人物の動きや情景を説明する「音声ガイド」をイヤホン越しに聞けるようにし、日本語のせりふも字幕付きだ。幼い子連れの客用に小部屋も設けた。新、旧作を取り混ぜて1日4～5本を上映している。

音声ガイドの制作や上映イベントを通じて全盲や弱視の人と銀幕の世界を楽しむ団体「シティ・ライツ」の代表。内装工事や設備費など1800万

円はわずか3カ月の募金で集めた。

仕事上の挫折などが重なり落ち込んだとき、映画に救われた。劇場に勤めていたころ「諦めていたけど、本当は見たい」という視覚障害者の声を聞き、2001年に団体を設立。交通事故で失明した夫とも活動を通じて知り合った。

「映画館では1人じゃない。同じタイミングで笑ったり、驚いたりできる喜びを分かち合いたい」(藤田康文)

2017.1.1

※ほか 東奥日報、岐阜新聞、琉球新報などに掲載

2017年1月1日

毎日新聞「誰もが楽しめる映画館」

ツイッター @mainichi_shuto フェイスブック 毎日新聞 首都圏版



視覚障害者の隣に座って映画の場面を言葉で説明するボランティア活動を2001年から続けている「ユニバーサルシアター」代表、平塚千穂子さん(44)が、そんな疑問から「ならば自分で作ろう」と決めた。設立資金をクラウドファンディ

ングなど募ったところ、3カ月で531人が賛同して募金に応じた。館内には一般席15席と5席分の車いす用スペースのほか、ベビーカー1台と母親が入れる防音完備の親子鑑賞ブースも設置した。上映作品はすべて音声ガイドと日本語字幕付き。全席にイヤホンジャックが完備され、用意されたイヤホンIIで、音声ガイドや難聴者の本編音声聞くことができる。音で映画を楽しむ視覚障害者も、戦車の走行音から小鳥のさえずりまで、迫力あるサウンドを味わえる。

「米国では20年前から街中の映画館で、話題作が当たり前に音声ガイドや字幕付きで上映されているのに、日本にないのはなぜ?」

全盲記者 岩下恭士のユニバーサロン



いわした・やすし 10歳で視力を失った全盲記者。1986年、毎日新聞に入社。点字毎日編集部を経て、98年から人に優しい社会の仕組み「ユニバーサルデザイン」をテーマにネットコラムを配信。54歳。

誰もが楽しめる映画館

ホームシアターのような小さな映画館だが、観客同士の触れ合いは日本一だ。「1人で来ていた目の不自由な人を、他のお客さんが駅まで連れて行ってくれたり、自然にサポートしてくれたりするような関係が生まれるんです」と平塚さん。チュプキはアイヌ語で、木漏れ日のこと。「いろんな人が自然の光に包まれるような場所になれば」と平塚さんは期待する。JR山手線「田端駅」北口から徒歩5分。事前予約すれば田端駅からの送迎にも応じる。水曜日定休。03・6240・8480。

ンクなどで募ったところ、3カ月で531人が賛同して募金に応じた。館内には一般席15席と5席分の車いす用スペースのほか、ベビーカー1台と母親が入れる防音完備の親子鑑賞ブースも設置した。上映作品はすべて音声ガイドと日本語字幕付き。全席にイヤホンジャックが完備され、用意されたイヤホンIIで、音声ガイドや難聴者の本編音声聞くことができる。音で映画を楽しむ視覚障害者も、戦車の走行音から小鳥のさえずりまで、迫力あるサウンドを味わえる。

「米国では20年前から街中の映画館で、話題作が当たり前に音声ガイドや字幕付きで上映されているのに、日本にないのはなぜ?」

「ユニバーサルシアター」だ。「米国では20年前から街中の映画館で、話題作が当たり前に音声ガイドや字幕付きで上映されているのに、日本にないのはなぜ?」

2017年1月14日